間の品位である。固より肉體的の生活がある故に、色々と此の方からの干渉を受ける。是れ吾々が物質界にも屬して生活して行く爲である。併しかゝる運命を支配する生活は、精神の中に働いて居る。そこで精神の生活と、肉體の生活との鬪爭がある。是れ吾れ等の生活である。

然し人間は物質的生活に降服すればする程、その內的生活が狹められて行く。けれども反對に精神生活を高調すればする程、壓迫の生活から開放される。例へばドラマに現はれて來る我れ等の一生涯は則ち鬪爭の生活である。精神を考へる時に、內的生命が湧いて來る。肉體を思ふ時に、壓迫の不快が感ぜられる、是れ之を內省する者には何人にでも了解される事柄である。吾々は斯る生活によつて、自然に打ち勝つ、その時には復た、自我が擴張される。言葉を換へて言ふと、物質的生活に打ち勝つて精神生活を發展せしむるのである。此處に眞の自己擴張がある。かゝる自己擴張は決して他人の利益や、他人の幸福を害するものではない。

物質界を征服した眞の自由の天地が開かれる。然らば其れは何處より來るか、是れ卽ち天地の大なる精神、卽ち神と我等の精神とが互に一致することである。こに無上の力が湧く。

五

吾々は固より六尺に足らぬ肉體である。しかしそれでも其の內に無盡藏の精神力を有して居る。例へば我が日本の昔の美術界に於ける彼の刀の鍔はどうであるか。直徑二三寸に過ぎない。けれとも此の小さき物の中に、美術の妙諦が吹き込まれてあるのには驚かざるを得ない。彼の小さな鍔の中に、畫かれた空や波、畫かれた月や雲は、多くは穿た穴に過ぎない。けれどもそこに無限大の天地が現はれて居る。是れ人をして賞嘆措く能はざらしむる所以である。斯くの如き傑作は決して凡人の企て及ぶ所でない。必ずや作者の頭に天地が這入つて居つて、それが作者の熱血によつて作物に卽き込まれたのである。此の小さな作物の中に無

限の天地が刻み込まれて居る。

是れ實に大なる自己擴張である。是れ自然に對する大なる反抗である。吾れ等は何時も斯う云ふやうに小さな精神にも宇宙の大靈を入れ、そして運命を開拓し、征服して行くことが出來ると思ふ。

神は吾々と共に在り、吾々は神と一になつて、その意志を表現し行くべきものである。神が吾等に許すものは精神の自由である。吾等は此の自由の天地を開拓して行かねばならぬ。運命に支配さるゝに非ずして、自身が運命を支配し、開拓すべきものである。人動もすれば、遺傳の重荷を云々するけれども、斯るものゝ爲めに人間が支配されてはならない。若しさう云ふものがあれば我れ等は之を活用するがいゝ。そして我れ等は眞に自由の生活者となるべきである。故に自然の壓迫を脱し、それに支配さるゝものとならず、眞に人格者となり、無限なる靈界の人たらんとして努力すべきである。

無常と久遠

一

無常とは常の無いと云ふので、流轉、變化のことである。久遠とは何時も變らぬことである。人生は何時迄も變らない眞理を摑んで、何處までも之を離さないやうにするのが本然か、或は然らず、一度眞理を捕へ得たとしても、之を益々向上し、彌々高めて行くのが本然か、何れが是か何れが非か。是れは吾々が世界に對する上に於て甚だ大切な關係を有する問題である。若し一度眞理を摑むだならば、それで目的が達せられるのでありとすれば、摑みさへすればそれで最早望みは足るのである。然るに眞理は何時までも、追ひ求めて止まざるべきものとすれ

ば、それは何時も動的であつて、滔々として流れて止まぬ大河の如きものである。此の何方を採るか、それによつて人間の位置が變つて行く。元來何時の宗教でも、道德說でも不朽不變の眞理を把持して居るとするのが普通であつて、例へば基督教に於ても、その教ゆる所は、何時も變らぬ眞理であると考へて居る。儒教でも孔孟の教は眞理で、その外に眞理は無いと考へて居る。佛教に於ても亦然りで、釋迦の說いた教は單に現世に於てのみならず、後の世までも變らぬものなりと考へられて居る。

斯る考へ方は宗教や倫理の上に於て、近代までは何處でも同じであつた。否學問上の事でも概してさうであつて、始め發見されたものを、千古不磨の眞理なりとし、後世の人は唯だ之をのみ學ばゝ足るとされて居た。然るに近代の思想は、此の考を全く破壞した。而して其先鞭を付けたるものは、彼の天文學に於ける新發見である。即ち動くと思はれて居た太陽は動かず、動かずと信ぜられて居た地

球が、反つて太陽の週圍を廻轉するものなりと解り、平面なりと思はれて居た地球が、球形であると知られて、遂に昔より固執された思想が打ち破られた。之は實に世界の思想上に於ける一大變化と云はざるを得ない。然るに唯これ丈けに止まらず、新發見は續々山の如くに現はれて來た。於是人類の求む可きは此の如き新しき眞理であることが强く感ぜられるやうになつた。乃ち不變常恒なる眞理は一時に握ぎらるゝものではない、之を久遠に追求せざるべからずと云ふ思想が湧いて來た。

單に人間の知識がしかく發展するのみならず、宇宙全體も亦たさうである。其は常に同一の狀態に在るのでない。時時刻々變化或は進化しつゝあるのであつて、現在は其發展の眞最中に有るものとせられた。今日の狀態は決して太古のそれではない。例へば天文學に於ては、世界の始めは雲霧の如きものであつて、それが遂に地球のやうな天體を形造し、始め熱の球であつた地球も幾千萬年の間に冷却

して、遂に今日のやうなものになつた。生物の進化でも、始めアメーバーの如き微細な動物が、遂に人類まで到達したのである。人類の歴史にあつても、言語風俗等、何千年或は何萬年の歳月を經て、やつと今日の文明が表はれて來たのである。進化發展とは今日宇宙、萬物、人間界を說明する鍵であつて、萬物皆な久遠に流轉否な進展しつゝあるものとするのが現代思想の一大特徵である。

二

世の中の森羅萬象悉く進化發展し、宇宙全體が動的のものであるとすれば、人類も亦其間に介在して、此の大なる運動のなかへ卷き込まれるのは當然である。從つて吾々も前人より享けた所のものを引續き發展せしめねばならぬ。之を增加して前時代より後の時代へ移動せしめねばならぬ。即ち前進運動を何處までも續行して行かねばならぬのである。或る固定した眞理を離さぬ事が人間の任務であるのでなくて、各自が大に働いて少しでも人生の內容を豐富ならしめて行くので

ある。人間は此の事に就ては皆な互に共同の責任を有し、現代の文明が次ぎの世へ移り行く時には多少たりとも、その光彩を增して居ねばならぬ。彼の古代に於て行はれたやうに、徒らに僧院に蹲居して、靜觀を是れ事として居るのが、能ではない。此の如き態度、是れ實に現代の誇とする所である。

けれども只今述べたやうな現代の特質には、眞に偉大なるものがある代りに、復た極めて輕薄に流れ易い缺點を感ぜしむるものである。即ち一切の生活運動が、變化でありとすれば、固定の狀態は破られて、人間も亦た絕えず潮流と共に押し流されて行くことになる。從つて何時も不安の狀態に居ることになるのである。又運動する所の部分々々が、各自に活動し、發展し行くとするが故に、何處に生活の統一點を認めるのか、それが六ヶ敷い。何が全體の目的なるか、生活の內容を攝み得なくなつた。從つて吾々の生活は非常に不安定になつたのである。一瞬間〳〵の生活は實に疲れる。斷片的の生活には興味がない。而も無趣味は人間の

堪へ得る所でない。始終追かけ廻はされて居るやうな生活は、その繁雜に堪へきれなくなるものである。是に於て何事かに生活の安定を得やうとする强い要求、願望が起つて、時間と共に流轉する生活を呪ふに至るのである。例へば非常に忙しい業務も一日の暇を盗んで鎌倉へ坐禪に行くなど云ふことのあるのは、此の消息を漏らすものではないか。

三

されば人間と云ふものは、その生活に於て、如何にかして時間を超越し、之によつて安定することを要求する。即始終變化せず、嚴として動かぬものを摑まねば止まざるものである。然しそれはどうして出來るか。吾々はさうするには人間以上の生活の域に這入つて行かねばならぬ。換言すれば、高い〳〵精神生活を築いて行かねばならぬと思ふ。かゝる生活は自然に等しい生活を爲すに非ずして、自然を超越し、動物界を超越した、靈界に踏み入つて、其處に創造の力を逞うす

るのである。抽象的の言葉を以て云へば、眞善美の世界が作られるのである。否な此の世界と云ふのは外界にあるのではない。吾々の精神生活のうちにある。眞善美は吾々の內的生活である。斯くて吾々の精神的生活が豐富になる。吾々が努力すればする程——丁度彫刻家がその刀を以てきざめばきざむ程、その作りつゝある像の線が細かくなるやうに、——吾々自身の人格のかたちが、出來るのである。而もこれは浮世の氣ぢぐれから來る仕事ではなくて、ここには卽ち有限な世界を超越する、宇宙の根源なる、絕對者卽ち神が働くのであると意識するのは、是れ宗敎の特性であり、特權である。更に語を換へて云へば有限と無限、人と神とが渾然として一となる妙境である。若し吾々にして一度此の妙境を味うことが出來たとすれば、何ぞ流轉を憂へん、又何で無常を嘆ぜん。動中に靜を觀ることも出來るし、靜中に動を探ぐることも出來るのである。

然し斯う云ふことは言語を以て如何に說明しようとしても、それは極めて困難

てあらうと思ふ。私は嘗てオーガスチンの傳を讀んで、次ぎの節に至つて大に感じたことがある。それは丁度吾れ等が今考へて居ることを説明するに足ると思ふから、之を以て此の一篇を結びたいと思ふ。

丁度三八七年のことである。モニカは多年熱涙を流して求めた禱り空しからず、その愛子オーガスチンはアンブロジウスより洗禮を受けて、斷然基督教徒となつた。それより間もなく彼れ等はイタリヤを去つて、故郷に歸ることとなり、マイラントを出發して、既にチーベル河畔のオスチアと云ふ處まで出て、其處に滯在して、出帆の船を待つて居た。その時モニカは突然熱病に犯され、病は急に重くなつた。そして一日失神の狀態にさへ陷つた。それが幸にして覺めると、周圍のものに向つて、『お前達はこの母を此の地に葬るであらう』と云つた。その時オーガスチンは默つて答ふることさへ出來なかつたが、彼れの弟は之に對して、彼女はどうかこんな異郷で死ぬるやうなことはなくてほしい、そして古郷で安らかに

死んでもらひたいと云つた。彼女は之を聽いたときに、非難のまなざしを彼れにむけ、そしてオーガスチンとその弟に、次ぎのやうに云つた。私は此のモニカの言葉を實に立派なものであると思ふのである。即ち彼女は云つた『茲の何處へでも私を埋めてくれ、そしてそれに就ては心配をするな。唯だ然しながらお前達に望む一事がある。それはお前達が主の机の前に居る時には、どんな土地に居ても、私のことを思ひ出してくれることである』斯う云つて後、彼女は再び沈默し、その病は益々重くなつた(オーガスチンの告白第九篇十一章より)

『主の机の前に、必ず私を想ひ出してくれ』是れ基督教徒の強い信仰の立場である。我れ若し神と一なるを得れば、或は古の基督教徒の語を借りて云へば、我が名若し神の前に錄さるゝを得とすれば、吾々に取つてこれより心強いことはないのである。風吹けば吹け、雨降れば降れ、我れに於て浮世のこと一として眞に我を危からしむるものはないのである。

幸福なる不安

一

吾々は今新しい年と、舊い年との分岐點に立つて居る。そして色々な感想が動いて、心の世界は實に多忙である。古來の習慣として大晦日と云へば、總勘定日であつて、世間一般も非常に繁忙を極めて居る。吾々の子供の時代には、物の勘定は凡て六月末と十二月末とであつたから、何を買つても此時期より外には一切支拂はなかつたのである。

大晦日は實に何れの方面にも、一年に於ける總勘定の時の如き感があつて、今吾々の心の中は非常に多忙である。電車へ乘つて見ても、乘客が平常より非常に

多い。そして口々に多忙を言ひ合つて居る。人間が、恰も時間の爲めに引き摺られつゝあるかの如くで、斯の如き多忙に暮らす事は實に惜しいやうな感じもするのであるが、大晦日は實に容易ならざる日である。

勿論、日に吉凶は無い。日は何時も同じである。暦などに由つて、色々と意味を附する人が有るが、吾々から見れば全く、無意味である。されば大晦日とて決して特別の日では無い、唯舊い年と新い年との中間にあるが故に、舊い年を送つて新しい年を迎ふるの準備を爲さなければならない日なのである。卽ち此の時を利用して何等か精神的に利する所が無ければならないと思ふのである。故に吾々は此時を以て吾々の靈性の進歩の爲めに、或は生の更進の爲めに資する所あらしめんとするのである。

此の事は基督教會に於ても、昔から非常に考へられた。除夜なども矢張り行つたのである。吾々の青年時代は寧ろ漢學の思想から、親友相會して、詩などを作

つて夜を過したものである。除夜は舊い年を送つて、新しい年に於ける生活を更に一層新にせんことを期しつゝ其準備の爲めに費すのである。故に此の時には色々新なる希望が湧き溢れて來る。

今舊い年は去つて、新しい年は來らんとして居る。しかし之から來らんとする年は果して如何なる年であるか、之を知らんとするは人情である。しかし何人にも將來は分るものでない。唯新年は黑い幕に包まれたまゝ、吾々の前にと迫つて來る。新しいものを迎へる事は嬉しいが、其が何物であるかを知り得ない時に、其處には大なる不安が存する。吾々は今大なる不安の前に立つて居る。しかし此處にまた言ひ知れぬ、面白味が有つて、嬉てそれが大なる幸福でなければならない。

今私は『幸福なる不安』と題して語らんとして居る。是れ此の不安を持つのは人間の特權であると思ふからである。人間以外には何物も斯る心境は持ち得ないの

である。

二

此頃北海道では積雪甚だしく、北陸道も非常に雪が多くて、非常に其の害を蒙つて居る。崖は崩れ、海嘯起り、家屋は破壞された。又報ずる處に依れば、チーフー島へ阪鶴丸が乘り掛て、沈沒に頻しつゝある。船體を餘す僅に五尺、甲板には五百の乘客が徘徊して、悲哀の聲を振り絞り、救助を請うて居る。救助船は波の爲めに寄り附くことも出來ずして之を如何ともすることを得ず、冒險的の若干の人は端舟に乘つて、救助船に遁れたが、他の人々は皆凍死せんとして居るとの事である。人々の心はどんなであらう。

人間が不豫見的の危害に遇うて、如斯苦しむことは決して稀ではない。而して是等の危害は人類一般の記憶となつて、永久に不安になつて行くものである。併し他の動物であつたら何うであらう、獸であつたら、鳥であつたら、何うであら

う。それは一度過ぎ去れば何等の不安もない。これ彼等は瞬間生活を送つて居るからである。

人間は瞬間生活に安ずる事は出來ない。將來を憶ひ、過去を顧るの特權を有してゐるのである。或は過去の喜を追懷する事も、將來を希望する事も自由であるのである。吾々の生活は現在ばかりでは無い過去を土臺として、將來の幸福を望み、それに近づくことを以て喜びとして居るのである。他の動物には斯る生活が無い。即ち動物には過去の追懷も、將來の眺望も無くて、唯一時的の瞬間生活のみに滿足して居るのである。

基督は『狐は穴有り、空の鳥は巣有り』と云うて居る。狐は穴有れば滿足し、鳥は巣以上に何等の求むるものも無い。此の巣を大きくし廣くするの希望は更に無い。前の巣は惡かつたから、今度は之を改造するの考もない。唯先祖傳來の昔の儘の巣を造つて、滿足し其處に何等の不安も苦痛も無いのである。併し基督は

『人の子は枕する處無し』と喝破した。之は無論基督自身の事を云つたのであるが之を一般人間に當て篏めて見ると非常に面白いのである。

それは成程吾々には巣も穴も無ければならない。元來は持つべきものである。併し一般から見れば職業さへ得る事も出來ず、巣も無ければ穴も無いと云ふやうな人々も實際に於て澤山有る。又有形上の地位は得て、肉體上の生活には何等不滿の無い人々も、一歩進んで其精神の生活に立入つて觀れば其處には必ず多くの不平不滿が有る、悲哀が滿ち〳〵て居るものである。若し其處に不平が無かつたなら、其人の生活には最早何等の進歩も無くなるのである。

吾々の精神生活は絶えず、向上しつゝある。其處に何時も不滿がある。玆に人の子は枕する處無しと云ふ狀態が有る。而して始終動いて居る。何處まで行けば滿足し得べきか、之は永久に存續する、大なる問題であらうと思ふ。而も當人は**之を追求して休む處、憩む所を知らないものである。**

三

吾々は色々と道理を考へて居る。或は色々な希望を持つて居る。又吾々は何を信ずべきか、何を穿鑿すべきか、或は何を爲すべきか。更に如何程考ふべきか、如何程爲すべきかを思惟しつゝある。吾々は之れ丈信仰したから之れ丈考へたから之れ丈思索し、之れ丈愛したから、それで終結を告げた、成就した、滿足したとは考へられない、永久に進むのみである。

此處に人生の非常なる意味がある。茲に何時迄も未解決の不安がある。しかし茲に又幸福があるのである。吾々の生活が發展であり、向上であればこそ其處に喜もあれば愉快も有るのである。吾々の生活が退歩であり、墮落である時に、其處に何の幸福、何の喜びがあらう。されば吾々の生活は永久に發展であり幸福であるのである。

基督敎にしても、吾々の如く解さない人々は、人間は信仰上の問題に向つても、既に定型された信仰個條を遵奉すべきものゝ如く考へて居る。丁度昔の數學者が、幾何學の定義を發見した如くに考へて居るのである。

しかし吾々の宗敎生活上、思ふ事、行ふ事、信仰する事が、幾何學の定義の如くに、一度發見されたものが、永久に眞理であり、從つて滿足し得べきものであるとは、吾々の到底首肯する事を得ざる所である。人が一度考へ出した事を、其儘考へて之れで可なるものとすれば、其處には生々した處が無くなり、何等の進歩、何等の成長もない、卽ち死物になり終るのである。

精神の生活は然らざる所に、意味有り、價値有るのである。昔の人の言ふた事、行ふたことを、其儘受け繼ぐものとすれば、人生は唯模倣たるに過ぎない、機械的たるに過ぎずして、何等の意味を止めなくなるのである。此の生きた世界に都合よき、活動に適當したものを作つて行くのは發見である。新進の工業者は過去の人の經驗を基礎として、更に新なるものを作つて行くのである。

吾々の信仰に於ても、先人の發見を土臺として、先へ〳〵と探つて行き、尋ね て往く處に意義があるのである。しかし前途は茫乎として、望むべからずである。 會々不定なる事實が突發しては、吾々の生活を妨げる、其處に不透明なる處があ つて、人は絶えず不安を與へられるのである。併し此の不安の中にあつて、自己 の信ずるがまゝに、開拓して行く處に幸福が生じて來る。卽ち吾等の一生は何處 まで行くも、限りは無い、未成品なのである。

四

若し吾々の生活が、一月一日より十二月三十一日迄暦の如く循還するものとす れば、其處には何等の奮發も、激勵も無い、實に平凡極まるものであつて、退屈 な生活なりと嘆息せざるを得ない。年は新になつても、去年の一月一日と今年の 一月一日とは、少しの變化も進歩もなく、更に一昨年の新年と、或は十年前、二 十年前の新年とも、少しの異變もなく、風光年々歳々春は同じ樣に、人生も變る

所なしとすれば、吾々の生存は全く無意味に終る事になるのである。

吾々の境遇は年々歳々、變化して行かなければならない、愈々進展して行かな ければならない。然も前途は無限に展開され得べきものであつて、永久に未成品 なのである。しかし奮闘の生活を積み重ね積み重ねしつゝある所に、吾等の幸福 が産まれて來る。然るに之れが循還のみであれば、之れは唯機械的たるのみであ つて、人の造つた時計と少しも變つた所はないのである。

人生は死せるものでは無い、或る時は迷ふ事も有る。困る事も、疑惑に陷る事 も、失望する事もある。それに不定なる事實が突發して來るから、不安に滿ち滿 ちて居るので、一面から觀れば確に、暗黑に包まれた人生である。併し斯る方面 のみを見て、直に人生は迷である、不可解であるとして、自暴自棄に陷つてはな らない。

人生はそれが努力の生活であるならば、矢張り前進であるのである。汽車が東

京驛を發して、曲り紆曲つて進んで行くが、實は一直線上に在つて、目指す處へ近づきつゝあるのである事を感ずる時に、之れは何れの方面に向つて走るとも、何等の疑も、何等の不安もない。之と同じで人生も發展しつゝあり、一直線上にある事を自覺する時には、何等の疑も何等の逡巡もなく、唯全力を傾注した努力あるのみである。

無生物から生物に進化し、極めて野蠻であつた、世の中が今日の文明を釀し、更に幾多歴史の證明する進化の理を悟る時に、人は到底人生の向上を疑ふことは出來ない。人生が一直線上にありとすれば、或る時は迫害に苦しみ、迷ふことも あり、失望に陷ること有りとも、聊か不安を感ずべき理由は無いのである。

吾々個人々々には、皆相當に道が開かれて居る。されば之に向つて各自が奮勵するのみである。けれども安閑として、碌々とした、生を送る事は許されない。生きて居る世界に生を享けた吾々は、また生きて動いて行かなければならない。

絶えず生々した心持を以て行かなければならない。然るに日本人などは、忽ち隱居してしまふ。隱居すれば凡ての活動は、停止するのであつて、精神的の死を意味するものである。

基督敎は此の間の消息をよく見貫いて居る。嘗て之が東洋思想と異る處である。ポーロは『吾れこれらの望を既に得たりと言ふに非ず。亦すでに全くせられたりと言ふに非ず。或は取ることあらんとて、我たゞ之を追へ求む。キリスト之を得させんと我を執へ給へる也。兄弟よ我自ら之を取れりと意はず唯この一事を努む。卽ち後に在るものを忘れ、前に在るものを望み、神キリストイエスに由て上へ召されて、賜ふ所の褒美を得んと目標に向ひて進むなり。』と敎へた。

努力して居る間に、努力しつゝある間に、一日々々と其標的に近くなると云ふ所に、活動的の氣分が表はれて居る。然るに佛敎などを考へて見ると之とは大に趣を異にして居る。彼の大佛などを見ても悄然として涅槃の境地に落ち込むこと

を意味して居るので、活動的には非ずして、靜的の、軈ては寂滅を意味して居るのである。

佛が涅槃を語られた言葉に、人生の歸著は有ではない、無であると云ふも間違である、無でも有でもないと云ふも間違である。然らば何かと云へば、それは有でも無でもない、其の先きであると云ふのである。有無を超越せよとの敎は一寸面白いのであるが斯くする時には、吾々は只惘然としなければならない。寂滅爲樂の境地に安じなければならない。人生の根本目的は果して此處にあるのであらうか。

五

予は一日薄暮、郊外の野原を深く〳〵辿つて行つた。太陽は落ちかけて居て、空の色は赤く霞いて居る。上部は藍で下部は代赭色である。森は黑くなつて朦朧と見えて居る。田圃は稻を刈つた跡が株だけ殘つて居る。草は全く枯れてしまつ

て、火に燃えさうである。小川の水はチョロ〳〵流れて、冬の寒さを語つて居る。百姓はもう歸つてしまつたのか、もう誰一人見えぬ。四邊は全く靜で、天地の間に吾れ一人より外に何物も居らぬ如く思はれた。そして廣い原野を茫然と眺めてゐた時、淋しい氣持になつて、心は全く靜になつてしまつた。佛敎の欲する境地はかゝる所であらう。さて之で滿足出來たかと云ふと、否々、吾々はかゝる境地で到底安ずる事は出來ぬ。遂に予は此の靜寂の氣分を突き破つて神に禱らざるを得なかつた。そして此の靜かな野に立つて、燃えるやうな、感情を披瀝して神に祈つたのであつた。

木の葉が全く落ちて、枯木が突き出して居る所に鳥が止まつて居るやうな繪は日本には澤山有る。所謂、枯木寒鴉と云つて靜かな淋しい氣持を表はしたので、靜肅を意味するものである。吾々は折々靜かな心を持つべきもので一面から見れば斯る思想も甚だ面白いのであるが、吾々基督敎者は斯る淋しい感じ或は靜かな

氣持のみを以て滿足する事は出來ない。更にかゝる境地を突破した、深刻な、嚴肅な、活動的な精神を追求しつゝあるのである。此の精神が湧いて來て、永久に生の祕密を探つて行くのである。

吾々は過去に於て色々な經驗を有して居る。嬉しかつた事、悲しかつた事、勇氣の旺であつた事、失望した事、樣々のものは皆吾々の心の中に收まつて居る。人を愛した事、人に愛されたこと、人に憎まれた事、人を憎んだ事、是等は皆過去の經驗として、摑んで居るのである。而して吾々の將來は是等一切の經驗を土臺として、未蹤の道を前へ〳〵と開拓して行くべきである。

過去の經驗を其儘踏んで行くとすれば、之は甚だ愚であるが、之を基礎とし根據として、更に其上發展して行く處に人生の向上が有り、人間の幸福が增進して行くのである。吾々は斯る意味を以て、舊い年を送り、新しい年を迎へたいのである。

暗黑に包まれた新年ではあるが、之を怖れる必要は更に無い。吾々は人生が一直線に在る事を信じて居る。更に神は手を延べて、吾々に新なるものを開拓せしめんと、期待して居る事を信じて居る。故に今や不透明なる新年を迎へるの不安を有して居るが、其處に何等の悲哀も何等の失望もない。永遠な前途に對して限りなき幸福を感じつゝあるのである。光りは吾々の前に横つて居るのである。

基督敎の敎は活動的である、限りなき發展である。人生至高の穿鑿に有る。キリストが『狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所なし』と云つたのは、限りなき人生の追求者としての精神狀態を、よく表はして居るのである。ポーロの生活もさうであつた、而して吾々は其敎を受け繼いだものである。併し吾々は基督の如くポーロの如く、其儘模倣せよと主張するものでは無い。それを生かして働かして行けと云ふのである。

吾々の生活は、昔、聖者達の主張した事、行つた事、考へた事を土臺として、

更に新なるものを造り出して行くのである、其處に創造の權威があり、個人〳〵の尊貴があり、人生の價値があるのである。今吾々は此の意味を眞に理解しなければならない。そして、舊い年に於て爲し得ざりし事、考へ足らざりし事、愛し得ざりし事、是等の總てを來るべき新年に於て更に一層の勇氣と奮勵とを以て、之を進歩せしめなければならない。此の意味に於て吾々は、望多い新年を迎へたいと思つて居る。

人生の發展と死

春愈々闌にして、所謂花は紅、柳は綠と云ふ好時節になつた。是に於て人も自然の美にあこがれ、今日邊りは都大路に最も人出が多い。人の最も花に浮かれる時である。或は墨堤に或は向島に或は飛鳥山に――昔から花は吉野と云ふが、數から云ふと今では、櫻は東京より多い處はないかも知れない。到る所櫻花咲き亂れて居る。人は花に狂ひ、春の香に醉うて居る。此の時に當り、吾れ等は花を棄てゝ此の堂に集り、深く考へんとするのは何故であらうか。花を愛し春に親しむのは、自然に人の情である。然しながら唯だ花に戯れ、春の香に醉うて、それで果して人生の意義が分るであらうか、それは甚だ疑問である。

宵に嵐の吹かぬものかはと、云ふこともあつて浮かれて居る人の心に〻、さすがに天地自然の變化に無情を感ぜしめられるものである。如何に世を呑氣に、如何に社會に享樂しつゝ浮かれ狂ふ人も、一面此の大なる天地の流轉に對して、驚異の眼を睜らざるを得ないのである。

彼の唐詩選などを繙いて見ても、一面に浮かれ狂ふやうであるが、他面には不安の念に襲はれて居ることは明かである。例へば『此日遨遊邀ニ美女一。此時歌舞入ニ娼家一。娼家美女鬱金香。飛去飛來公子傍』と美人の裝を凝らした人達に戯れて、愉快に遊んで居るやうであるが、同じ詩人も忽ち『已見松柏摧爲レ薪。更聞桑田變成レ海。』とか又『古人無ニ復洛城東一。今人還對落花風。年々歳々花相似。歳々年々人不レ同。』など〻云つて、世の無常をしみ〴〵と感じて居る。

斯う云ふ譯で呑氣に美人を擁し、飲んで戯けて居る者でも、花散る朝、葉落つる夕には、心驚き胸さわぎ、不安の念に襲はれるものである。故に吾々は根本的

の考を立てゝ、何んな事が有るも、『吾が心は之である』と云ふ確乎不拔の信念が出來ねばならぬ。流轉極まる世界に在て、而も確固たる、根本的のものを掴む必要がある。即ち眞に生命の充實が無かつたなら、花を見、月を眺めても眞の喜は決して得られない、その美を感ずることも出來ないであらう。之を以て人間はどうしても永世――窮りなき生命――を求めて止まず、流轉の世界に生きつゝ、變化なき世界を憧憬して居るのである。

一體、人の生命、人間の靈魂は如何うなるものか。是れ大なる疑問である。實に靈魂不滅に就ては色々に考へられたのであるが、私は此處には唯だ其の一方面よりの考を述べて見たい。

靈魂不滅のことを考ふる時は、必ず來世の問題が起る。而して此の來世の考は上古よりあつたものである。乃木大將は、先帝に殉死せられた。私は不幸にして乃木將軍が來世を如何に解されたかを知らぬ。しかし、殉死は古い〳〵昔から行

はれた事である。日本ばかりではない、支那にも、印度にも其他の國々にも、盛んに行はれた。殉死の意義は自分の尊敬して居る君、親しき友、愛すべき家族の者を、獨り彼の世に旅立たしむるに忍びず、來世に迄も同伴せんとする溫情より起つたもので、忠臣は君の爲め、孝子は親の爲め、妻は夫の爲めに殉死した。即ち未來に迄も忠孝を盡さんとする赤心が根本になつて居るけれども後に至り其弊に堪へず、埴輪を作つて之に代へたのである。彼の世にまでも一緒に往くと云ふからには、來世があると云ふ確實な信仰がなくてはならぬ。

吾等は去る四月八日、日比谷に釋迦の誕生會が催されたことを耳にした。此の催は實に俗惡極まるものであつたやうである。吾々も以前小供の折に、四月八日には老嫗に伴はれて度々行つたものである。さうすると本堂に地獄極樂の繪が掛けてあつて、此の世で善事を爲した者は極樂へ行けるが、惡事を爲した者は、血の池、針の山へ逐ひ上げられる有樣を見せられたものである。

此の地獄、極樂の思想は佛敎本來のものに非ずして、婆羅門敎にも有る。希臘にも埃及にも有る。埃及の思想が印度へ傳つたか、印度から埃及に傳つたかは判明せぬが、兎に角昔より、地獄、極樂の信仰は人類一般に行はれて居つたものである。然らば何故に此の思想が起つたかと云ふと、それは因果應報說から來たのである、應報は唯現世に於てのみあるものでなく、未來に於てもあると考へるのである。と云ふ譯は現世に於て善事を爲す人が果して榮え、惡事を爲す者が果して亡ぶかると云ふに、此の應報は決して確かなものでない。主觀的には如何か解からないが、客觀的に視ると、惡人榮え、善人苦しむことも多い。是に於て來世の信仰が起らざるを得なかつた。

尙一つは、此の世では一生を怠惰に送つた者がある。さうすると來世に於て其の補ひを爲さうと云ふのである。此の世に於て勤勉ならざりし者は、彼の世に於て、勤勉力行し以て現世の代償を爲さうと云ふのである。傳によると、彼の君士

但丁大帝はその死の直ぐ前、即ち三三七年に受洗をした。帝は其以前より受洗を勸められて居たが、死に際に非ざれば必要なしと云つて居た。即ち生きて居る間は我が儘勝手なことをなし、そして死ぬ時に洗禮を受けさへすれば、極樂淨土へ行けるものと考へて居たのである。如斯來世に於ては、現世の罪惡が忽ち雪げるものと考へたのであつた。これも亦一つの來世の信仰である。

基督敎でも來世に就ては色々考へられて居た。一度天に喇叭が鳴り響けば、死んだ人は皆な蘇生すると信じられて居る。之は猶太敎より出た所の死人の復活と云ふことであつて、此の時來世の裁判があると考へられて居たのである。然らば餘り善人でもないが、餘り惡人でもない者は如何なるか。此の問題に答へる爲め、カトリック敎では煉獄と云ふ敎義が出來た。即ちさう云ふ人は、煉獄の火中に這入つて火を以て淸められるのである。復活の思想は、猶太に起り、佛敎には輪廻の說、即ち人間が醉生夢死すれば、死して草となり獸となる。草や木でも善事を

爲さば、馬や牛にもなる、更に人間にもなれる。人間になつたものは菩薩にもなれるのである。

併し基督敎には來世の思想は在るが、輪廻の信仰は無い。上に云つたやうな應報思想の爲めに生ずる來世の觀念も無いと思ふ。若しそれがあつたとしても、それは基督敎の大精神から出たものではない。げちな人間の思想である。否な基督敎にはそれよりももつと〳〵偉い、高い、立派な徹底した主張があるのである。

基督敎では現世と來世とを區別しない。肉體の死はあるが、死をそれ程大事件とは思はぬ。死を以て人生の終極とも思はぬ。唯だ死を以て單に現世と來世とを連結する一つの鎖に過ぎぬものと考へて居る。即ち死は現世と來世とを區別する一つの關門である丈けのことである。現世は人間が發展し始めた時であつて、その發展は死の關門を通じて來世にまで續くものと信じて居る。

我れ等はダーウインの說によつて進化の理を聽き、近年佛蘭西のベルグソン、

獨逸のオイケン等により生命の發展を聽いた。ベルグソンの創造の生命、オイケンの生命の發展は、微妙な天地の働きによつて、非常に下等のものより、靈妙極まる人間が現出したことを云ふのである。天地の凡ての力が合し、偉大な働によつて出來た吾等人類が、茲まで發展し來りながら、死によつて終極を告ぐるものとするならば、人生は甚だ價値なきものである。宇宙は幾百億年を費やして斯くの如き大創造を爲し、人間の精神活動と云ふ特種のものを作り上げ乍ら、それが死によつて忽ち終りを告ぐるものとせば、自然の靈能も、天地の微妙も、極めて無意味なものになる。

然り天地開闢以來何億萬年の働が、一朝にして、一片茶毘の烟と化し去るならば、それこそ所謂人生朝露の如しで、實にくだらぬものである。萬物の努力によつて茲に人間と云ふ生物が出來、生きると云ふは、此の生物の命を土臺にして、それ以上に精神的の生命が出來、その生命によつて益々進んで行くことになつて

始めて人生の意義が認められるのである。

吾々は、善惡、正邪、自由、公平等を良く知つて居る。吾々は物の善を探り得る力を有して居る。物の美を知り、物の眞を知る精神力を有して居る。眞善美の世界を作り出して、其中に生きて居る。此の眞善美の世界を創造することこそ、是れ卽ち精神の生命である。斯る世界を造ることを得ざれば精神界は無い。吾々の生命は此の眞善美の世界に在り、そこに吾々は生きるのである。

斯くの如き精神の生命に、死滅は無い。吾々の四肢五體は亡ぶるであらう。けれども吾等の形而上的の生命は永刧無窮のものである。吾等は此の生命の發展を何所までも進めて行くべきものと云ふのが道理である。固より悲哉、吾等は四肢五體に拘束されて、自由に生命の發展が出來ない。然し吾等の存在の眞意義に思ひ及ばゝ、死によつて終るものに非ざることが考へられるのである。

基督敎者は死を怖るゝ者でない。又死を以て終極とする者でもない。基督敎者

の信仰は久遠の生命、窮りなき靈性を追求するものである。固より吾々は發達の低く、劣等な者である。從つて神によつて清められ、完全にならうとする努力を、何處までも續けて行くべきものである。之れが基督敎の根本的信仰である。將來――來世――は菩薩や、草木、禽獸に生れ代るなどゝ云ふ思想に非ず、來世は現世の繼續であつて、現世に於て爲し上げ得ざりし所の事を繼續して努力し、吾々の精神界を高潔にし、活動を益々勵み、彌々向上して行くと云ふのが我等の信仰である。此れが矢張り、カントの不死の信仰の根本であつた。

吾々は過失あり、誘惑に敗け、實に不完全な者である。然るに其使命はと云ふと、今世に於ては、到底爲し盡せない程ある。併し全き者と爲らんとし、眞の人格を作り上げようと努力するのが眞に基督敎徒たるものゝ道である。吾等は斯くの如き方面から來世觀を打ち建てることが出來ると思ふ。

實に人生發展の意味が何處に在るかと云ふことを考ふる時に、來世と云ふ信仰

に大なる意義があることが分る。若し吾々が人生の意味を眞に理解せずして、卽ち醉生夢死的に一生を送るならば來世に行く――未來に續く――資格なきやも知れない。ゲーテは其論者の一人である。自覺なき人間、人生の本義を辨へぬ人間の命は遂に消えると彼れは說いて居る。人生の眞諦は實に基督敎に於ける理想に立つて、精神界を確立せしめ、人生を根本より觀て、神と我と相呼應することを悟り神の御心を實現し行くことである。玆に力强き人格が確立する。さうすれば來世の信仰はグラ〳〵動搖するものでない。否な吾等の尊い信仰より考へて、幽玄なる眞理の存するものである。卽ち吾等は人生の發展の道程より觀て、死の先に大なる世界が開展する事を考へなければならぬ。然らざれば吾等の生存は實に無意味に終るのである。

奇蹟論
安息日
秋と信仰
もろ〳〵の時
其一、朝
其二、午時
其三、晩

奇蹟論

一

吾々は自由基督教の主張者である。自由主義の基督教と他の基督教と何處に違ひが有るかと云ふと、その要點は色々あるが、奇蹟を信ずるか否かと云ふことも、その一つである。故に基督教が奇蹟を信ぜぬならば、宗教に非ずと云つて、盛に自由基督教を攻擊したものである。否なさう云ふことは今日もある。併し自由主義者の奇蹟觀には、深い哲學的根據があるのである。

耶蘇の傳を見ると色々不思議な事が書いてある。彼れが海の上を歩行したとか死人を蘇生せしめたとか、水を葡萄酒に變へたとか、或は死んだ基督が後に至り

甦つたとか云ふ事柄が、歴史として殘つて居る。そしてこれ等の事柄を信ぜぬ者は基督教者でないと云はれて居る。尙ほ此の外、教會に傳つた教義に、三位一體と云ふことが有る。――神は一であるが三である、三であるが一であると云ふ事――卽ち神は、父の神、子の神卽ちキリスト、聖靈の神の三に分れて居るが、實は一つであると云ふので、之が三位一體說である。又贖罪論――キリストは多くの罪人の罪を贖はんが爲に死んだと云ふ事――等もあつて、これ等の事柄を奇蹟となし、人間の考では到底考へることは出來ないが、それは事實であるから之を信ずべしと云ふのである。併し乍ら我れ等自由主義の基督教者は之を信ずる事が出來ないのみならず斯る事に因つて、基督教徒であるか否かを區別するのは甚だ不道理だと信ずるのである。

斯る宗教上に於ける大切な問題は、單なる感情の上から解決す可きものではない。之を解決せんとせば、或は之を歴史の上より、或は聖書の上より、或は又哲

學上の見地から徐に解決すべきものである。我れ等から見ると、此の奇蹟に就いてはこゝ近年に至り、議論が大に進んで居る、否な原理上大に變化した點もあると思ふ。アウグスチンの唱道したやうな奇蹟論は別として茲に大に研究すべき事がある。今日では奇蹟を信じない事は、自然の法則を信ずる事になり、自然の法則を信じない事は、奇蹟を信ずる事になる。そして自然の法則を信ずる事は、理法を信ずる事になり、自然の法則を信ぜざる事は、不思議を信ずる事になる。さうすると奇蹟とは不思議と云ふ事であり、自然の法則外と云ふことになる。

然し不思議は世の中に澤山有る。人間が存在する事も、是れ大なる不思議ではないか。空氣は宇宙に遍滿して、我れ等之を呼吸せざれば忽ち死する。これも不思議ではないか。自己も生き、他人も生きて居るが故に、何とも思はないが、併しよく之を考へて見ると、生きて居る事それ自身が大なる不思議であり、宇宙の組織が此の生を可能ならしむるやうになつて居るのは更に不思議である。人間の

生、是れ實に不思議なものである。

二

見れば一本の樹が鉢に植ゑて有る。それは五錢か十錢で買へる。故にこれを何とも思はないが、此の植木が何に依つて生きて居るか。是れ大なる不思議である。凡ての草木が春に到れば、花を開き、秋になつて萎む。是れ洵に不思議な事である。海岸に立つて、遠く沖を眺め、大洋の茫々たるを見る。又甚だ不思議な感がある。海潮に滿干有り、月に盈虛が有る。何と不思議ではないか。さう考へて見ると宇宙間の物一として不思議ならざるはない。或る哲學者は『存在は是れ大なる不思議、大なる奇蹟である』と云つたが、實にその通りであると思ふ。

私は今筆を採つて、諸君に何をか語らんとして居る。又諸君が何日かの後、之を讀む。そして、私の云はんとする意味が諸君に通ずる、是れ亦た何んと不思議な事ではないか。

然し教會に於て說く奇蹟は、これ等の不思議とは意味が違ふ。教會で云ふ奇蹟とは自然の法則に反した、實際常に行はれて居ない出來事を云ふので、人間の知識では說明の出來ない事を、奇蹟と稱すのである。併しよく考へて見ると、若し一つを三つと考へ得、又三つを一つと考へ得る時代が來ることがあれば、其の時は三位一體も奇蹟ではなくなる筈である。故に我等は今日謂ふ所の理外の理を以て奇蹟となし、その上に宗教を建設しようとは思はない。何んとなれば、若しさうするならば、理論は宗教の敵であり、宗教は理論の敵であつて、此の兩者は竝立することは出來ない譯であるが、我れ等はさうとは考へ得ないからである。

然るに宗教は理論と衝突するやうに思ふから、奇蹟を宗教家が、說くのは恰も普通人が幽靈を信ずるやうなものである。學問の無いものは之を信じやう。丁度『幽靈の正體を見たり枯尾花』と云ふ句の通りで幽靈を信ずるものは、智力の不足して居るか、或は度胸が無いかの徒輩のみであるやうに、宗教の信者も亦た、

無智か、膽力のない者と思はれ從つて奇蹟を說く宗教は世間から時代遲れのものとして取扱はれるのである。

然しながら眞の大宗教家は奇蹟を排斥したものなることを知らなければならない。耶蘇に於ても卽ちさうであつた。馬可傳八章を見ると、その時代の人々は奇蹟を求め耶蘇に奇蹟をなさんことを要求したが、彼れは斷乎として、之を斥けた彼れは云ふ、『休徵(奇蹟)は此の世の人には必ず與へられじ』と。然るに耶蘇の此の眞意は當時の基督教徒と雖、了解することが出來なかつた。否な奇蹟はそれ程に當時の人の欲望したものである。是に於て馬太傳十二章では『預言者ヨナの休徵の外は之に休徵を與へられじ』となり、而もヨナの休徵と云ふことが、彼れヨナが三日三夜、魚の腹の中にあつても、消化されずに、生きて居たことを指すやうに、說明されて居る。然しヨナの休徵と云ふのは、彼れが神の道を說敎して、これで人を悔改せしめんとした、道の力の絕大なることを指すものであつて、決し

て彼の物質的な奇蹟を云ふものではない。耶蘇は奇蹟を排斥したが、若し彼れにして不思議を行ふことありしとせば、それは神の敎が如何に不思議な力を有するかに自ら驚いた事實がある許りである。そしてそれは彼れの人格と一致せる神の偉力であつたのである。此の意味に於て耶蘇は『それヨナより大なる者茲にあり』と云はれたのは事實であらうと思へる。

三

基督敎は前に云つたやうな反自然的の奇蹟を說く敎ではない。實に今日我々がかゝる奇蹟の信仰を排斥するのは、自然の大なる法則も亦た神より來ることを信ずるからである。固より自然の法則とは何ぞや、と云ふことに付いては六ヶ敷い問題が有るが、極めて簡單に之を云ふと、自然界に於て何時も同じ事が繰り返へさるゝのを自然の法則と稱するのである。彼の支那人の詩に『天之未だ陰雨せざるに迨び、彼の桑土を徹り、牖戶を綢繆す』と云ふのがあるが、是れ大雨の有る

前には、鳥類は必ず桑の根などを取つて、雨の這入らぬやう、巢の隙間を塞ぐことが常に繰り返へされるのを、人間が見て、鳥類がその巢を塞ぐならば、必ず雨が降り或は同じやうに、蜘蛛が網を張つて居るならば、必ず晴天であると考へるのである。若し斯う云ふことが必ず繰り返へされて百發百中であるならば、大雨の前には鳥が土で巢を塞ぎ晴天の前には蜘蛛が網を張ると云ふことが、自然の法則であると云はれて差支はないのである。併しこれは必ずしも百發百中ではないから自然の法則にはならない。

ニウトンが引力と云ふことを考へ出したのは、林檎の樹から落ちるのを見てゝあつたと云ふ。成る程さう云ふことも、常に繰り返へされて居たに違ひない。それが更に大成されて彼のニウトンの引力の法則なるものが現はれた。それによると『引力なるものは、物體の大さの比に從つて增し、距離の自乘の比に從つて減ず』るのである。是れ卽ち矢張り斯う云ふことが自然界に於て常に繰り返へされ、

從つて到る處、此の現象を見るからである。それが理學や化學にも應用され、そして力學と云ふエライ學問にまで成り、遂には世界の凡てを此の學問の力によつて、說明せんとさへ試みらるゝに至つたのである。そして世界の事物中で、我れ等には最も不思議に思はれる人間の生きて居ることさへ、かゝる學問の力によつて解決せんと、努力さるゝに至つたのである。我れ等は此の努力を尊重する。然し此の解決がつくかどうかは自ら別問題である。さき頃醫學博士の永井潛君が『生物學と哲學との境』と云ふ書を著はして、その中に、凡ての條件が具備すれば、試驗管の中で人間を製造することも出來る、と說いて居るが、併し凡ての條件とは何であるか、其の條件が必ず備はるか否かは既に頗る問題である。種々繰り返さるゝ事柄を纏めて自然の法則と稱し、そして之を以て世界の事柄を解釋せんとするのであるが、繰り返へさるゝものが果して何程あるか、又凡て宇宙の出來事は全部果して繰り返へさるゝものであるか、甚だ疑問である。吾々は二ツの目、

二ツの鼻や、口を持つて生れて居る。之が果して自然の法則であると云へやうか。若し目を三ツ有つて生れたならば、それは人間でないのであらうか。斯う云ふ事柄は自然の法則と云ふことで纏めることは出來ない。唯だ事實である。

彼の太陽は中心に在つて、其の周圍には遊星が八個ある。そしてその中の地球は、月を一個連れて居るが、此事實を指して、之れが自然の法則であると云へるものであらうか。木星と云ふ星はかなり大きな星であつて、七つの月を有して居ると云ふとであるが、吾々は地球が連れて居る只だ一つの月を眺めてさへ之を賞嘆し、春夏秋冬各々その情に堪へないものがある。若し吾々にして七つの月を眺めることが出來るとすれば、それこそ實に美觀を極めるであらうと思ふ。然らば地球のやうに只だ一つの月を有する事が、自然の法則であらうか、或は木星のやうに、七つの月を有することが、自然の法則であらうか。これは無論何れが自然の法則であると云ふべきものでない。これは只だ其の何れもが一の事實であると

云ふべきものである。

四

されば我れ等は、世の中の出來事の中には、自然の法則と云ふべきもの以外に事實と稱すべきものが澤山有ることを知らねばならぬ。物理や化學で定められた自然の法則の範圍内に屬するものもあるが、その以外に復た天文學や生物學、動植物の世界もあり、微に入り、大に入りては、際涯なく、無限なるものがあつて、決して一系統に纒められることの出來ない部類があることを知らねばならぬ。玆には即ち事實が生ずるので、其の生ずる以前に吾々が豫測し得るものでない。此れは法則とは違ふので、法則ならばそれを豫測することが出來るがこの事實はさうは行かない。

彼の天體の運行ならば之を豫測し得る。併し事實の突發は豫測し得ない。私の結婚の當時私には子供が十人出來ると豫言したものもあつたが、事實はさうでな

かつた。かゝる事は事實であつて、自然の法則ではない。從つて豫算の中に入れて豫測することは出來ない。故に世事を悉く法則的にのみ解することは出來ないのである。即ち法則が凡ての森羅萬象を支配するとは云へないのである。故に宇宙の出來事では法則を以て測り得るものと、さうでないものとの二ッがあることを知らなければならない。併し吾れ等は此の二ッを總括する者が神で有ると考へざるを得ないのである。

されば世の出來事には法則的なるものもあるが、然らざるものもある。法則に依つて發現するものには偉大なるものがあるが、事實となつて表れて來るものにも立派なものが有る。兎に角世の中には立派な事柄が、人間の想像外に忽然と突發し來つては、人間を驚かし、或は喜ばして居る。自然の法則的の事柄は、大なる祕密を語り、突發的の事象が不思議を現はし、世の變化を語つて居るのであつて、吾々は此の驚くべき事柄に對し、之を讃美し、之を畏敬し、之を讃嘆するの

である。

五

併しながら、此の二ッは決して衝突するものではない。例へば吾々が左と云ひ右と云つても、左と云ひ右と云ふものが、始終在るのでは無い。之は人間が徒らに附した名稱たるに過ぎない。前後、左右は見方によつては常に變化する。さう云ふやうに一方から見ると自然の法則となり、他方から見ると突發の事實で、所謂奇蹟となることもある。此の突發の事實は實に人世に重きをなして行くもので、其處に歴史が存し、神の顯現が特に窺はれることになるのである。

例へば吾々が重い病氣に罹つて、それが醫藥によつて癒されたとする。そしてそれを神の恩惠なりとして感謝するが、之をよく考へて見ると、通るべき道をまつ直ぐに通つて生きたので、一歩誤つて他の道へ走つたならば死するのであつた。併し其通るべき處を、經過しても尚ほ、死を免れぬ者も有る。故に甚だ不思議に

なる。之を科學的に考へると狹くなつて行く。然るに宗教的に考へると、甚だ廣く解される。それは宗教家には、法則と事實とに相竝んで精神の力があつて、自然の中に、人生の中に大なる神祕を語つて居るからである。

精神生活には其の際涯が無い。或は高く或は低く、或は强烈に或は軟弱に、或は劣等に或は雄大に、自由の天地は澎湃としてその爲めに開かれて居る。玆に人生の神祕がある。然るに此の大なる祕密、大なる不思議を悟り得ぬ人間は實に淋しいものであらう。突發的の事實の存する所に眞に人生の偉大がある。而して殊に最も不思議なのは、偉大な人格である。吾々が生れる事である。基督生れ、釋迦生れ、ソクラテス生れ、孔子生れた。これ等の人格が生るべしと自然の法則的に豫測し得るものではない。それは理化學、哲學の範圍で定めらるべき法則ではない。グーテ、シルレル、シエクスピーヤ等の如き、偉大な人物が現出して、世の中を引き上げて歴史を、卽ち精神の歴史を作つて行く。ベルグソンは之を創造と

云ふであらう。彼れの先輩ブートルーは之を偶然性（コンチンザント）と云つた。併しこれは新發見ではない、獨逸の思想界では永くの間之を自由と稱して來た。

此の自由あり、創造あり、偶然性あり、突發あり、これが爲めに人生には大なる祕密あり又興味がある。故に突發的に大人格が出現する。是れ大なる不思議、大なる奇蹟である。吾々の說かんとする奇蹟は實に玆に在る。卽ち吾々は此の意味の奇蹟を信ずる。

發展して止まざる人生は廣い〳〵宇宙に包まれて居る。大なる神祕は幽玄な人生に際限なく潛んで居る。吾々は此の潛在力を信ずる者である。從つて吾れ等の信仰心も此處に在る。吾れ等の宗敎心も此處に存する。奥深い人生の妙諦を探ちんとする眞實なる要求も此處にあるのである。

安息日

一

馬可傳二章二十一節以下には、安息日に就いて書かれて居る。安息日とは元來猶太敎に起つた一つの大切なる日である。その紀元や安息日を守ると云ふ事は、創世紀の初めに『神は七日の間に世界を作つた、天や地や、日や月や、星や、そして草や木や鳥や獸や――そして最後に人間を作つた』そして後に休息した。乃ち此の七日目に神が休息された事を學んで人間も七日目には休むのである。此の七日目を安息日と云ひ、此の日は休業すべき日なりと考へたのである。然らば此の七日と云ふ觀念は、何處から出たのであるか。日本にも支那から傳はつて、一

週間と云ふ言葉がある。猶太教の七日と云ふのは、ペルシャより來たのであらう何故に七日と云つたのか、聊か其起源を尋ねて見やう。ペルシャは早く天文學が進んだ國で、月の滿干を標準として大陰曆を作り、二十八日を一ヶ月と定めたのである。此の二十八日の四分の一は七日、即ち一週間になる。此のことから一週間が來たのであらうと云ふのが、現今學者の說である。

此の一週間說が猶太に傳はり、神が仕事を創めてから七日目に休業したから、人間も之に倣つて休業せねばならぬものと考へ、そして安息日には勞働してはならぬと云ふことになつた。其後に復た色々細かな規則が出來て、歩行さへ定められ、安息日には何里以上は歩む可からずとか、食物の料理も出來ないとか、云つて來て、遂に一切の勞働が禁ぜられるやうになつたのである。故に聖書の中にも、耶蘇が此日に病人を癒した事に對し、猶太人が反抗した事が書いてある。併し基督教で云ふ日曜日と、猶太人の安息日とは違つて居る。即ち安息日は神樣が仕事

を爲されて後ち、一日の休養をなされた日で、七日の最終の日であるが、日曜日は一週間の最初の日である。即ち週の一番初めの日である。日の位置が兩者に於て異つて居る。而してその如く意味も亦た違つた。基督教では日曜日は休み日と云ふ譯でなく、基督が復活を爲された日を祝ふと云ふ意味の日である。即ち之を祝さんが爲に、その信徒が一堂に會して共に祈り、共に語り、共に歌ひ、共に食した日なのである。

二

然らば吾々基督教者が益々進んだ意味を以て、日曜日を解してもそれは當然である。猶太人は日曜日を特別な日と考へた。此日は神聖であつて、何事も皆な神聖にしなければならないと考へたのであるが、吾れ等の見解を以てすれば、日曜日のみ神聖であつて、他の日は神聖でないとは思はない。日曜日に神に仕へるのなら他の日にも神に事へねばならぬ筈である。されば日曜日は然く特別なる日で

はない、只だ澤山の信者が離散して、各その業務に從事して居るが、何時集つて讃美歌を唱つたり、祈禱をしたりするか、其折が無い。そこで基督の復活した朝、卽ち日曜日の朝を期して、集會日と定めたのである。別に集會などをすることは必要でないやうに思はれるが、吾々は實に弱い者で、或は外よりの壓迫や、誘惑に或は內よりの煩悶や、懷疑に始終苦しめられるものである。故に折々信仰を同うする者が一堂に相會して、互に教訓し、奬勵し、又熱心を起す必要がある。或は相互に刺戟する必要もある。而已ならず團體的の生活を爲す以上は、折々相集ることが甚だ必要である。由來基督教は歐洲全土に瀰熳して、其活動も目覺しきものがあるのは、些細なことのやうではあるが、一週間に一度相會すと云ふ制度を有して居つたことが、その有力な大なる原因を爲して居るのである。今日佛教や其他の宗教團體に於ても、此事を悟つて、之を眞似したものも出來て來た。然し基督教の如く、一般的にはなつて居らぬやうである。されば斯る理由よりして、

宗教上より見て、安息日否な日曜日の定められたことは、看過すべからざる大切な事柄の一つである。

三

今日の如く煩雜、多忙な、そして能率增進のみを考へて居る生活を送る世の中にあつては、安息日は更に大切な意義を有するに至ると思ふ。卽ち近代人の生活上からすると、安息日は猶太教に說いてあるやうな意味を有するに至つたのである。實に今日の生活は多忙である。或は役所に、或は會社に學校に、家庭に繁劇を極めて居る。それ故慰安休息を求むる事は渴したる者の水を需むると同じである。一年の中に夏期休暇が必要とすれば、一月の中にも、一日の中にも、休息が無くてはならぬ譯である。一寸一服と云つて、働いた後には必ず休みがある。休んだ後には、再び大に活動し得るものである。今日の如き煩忙な時には、一週に一日の休養は實に大切である。昔は一、六の日が休日であつた。吾々が幼年の時

には、學校も一、六の日に、即ち月に六度の休日があつた。今日でも、工場などは多く朔日と十五日とを休日と定めて居る。何も七日に一度と限つたことはない。故に休み方には種々ある。然しその趣旨に於ては皆な同一義である。

併し他人は皆な働いて居るのに、自分一人休んで居ては、甚だ心地のわるいものでで、休んだ氣分はしないものである。それ故休日に非ざる日に休むことは、少しの休養にも、慰安にもならぬ。却て苦痛を感ずるものである。茲に於てか休日を一定する必要が生ずる。西洋に於ては日曜日に一般に休むことになつて、日曜日には何處の店も皆な戸を閉ぢ、仕事を休み、汽車の數さへ減ずる國もあるし、諸所の工場の汽笛すら聞えぬ。從つて機械も音を立てず、昨夜まで多忙だつた大きな町々の光景は一變してしまふ。—我國の元旦の如くに—如斯にして始めて休養が出來るのである。日本の如く學校は休みでも、工場は盛に働いて居ると云ふ有樣にては、到底休日の意味を徹底せしむることが出來ない。休日を一定すること

とは實に大なる社會上の問題であらうと思ふ。

五日に一度、或は十日に一度、十五日に一度なりとも、何れが善いとか、惡いとかは云へまいが、然し、一週間に一度休むと云ふことは、二千年否なそれより以前よりの習慣で、早く既に世界一般に廣く行はれて來た休み方であるから、此の習慣に從つて、休むことは、世界的の慣習を尊重する所以となるのであり、又世界的に便利であるから、我れ等は須らく之を採らねばならぬ。そして安息日には第一に身體を養ふ必要がある。郊外に走つて、孟子の所謂洪然の氣を養ふもよい。或は友の家を訪ふて舊交を溫め、又は病人を慰め、或は有益な遊びに費すもよし。されど只だ身體而已の休養を是れ事とするやうでは、實にくだらないことになる。更に吾々に必要なのは、「精神を洗ひ濯ぐ」ことである。吾々の精神を培養することである。

毎日〳〵を有意義に過さんとせば、其朝に於て覺悟せねばならぬ如く、一週間

を健全に送らんとせば、其初め日曜日に於て覺悟せねばならぬ。先づ週に於て消耗した元氣、汚れた精神を、剛健に清淨に恢復せねばならぬ。而して來る一週間に於ける活動を全からしめねばならぬ。是れ卽ち一週間に一度の休日を必要とし、又最も有効ならしむる所以である。

四

安息日は人の爲めに作られたるものであつて、人は安息日の爲めに作られたものではない。『人の子は安息日にも主たるなり』とは、基督の敎訓である。安息日にも主たるなりで、此のもと云ふ小さな言葉に注意を要する。即ち人間は凡ての時に於て主たるなり、との意味を有するので、玆に基督敎に於ける大なる精神が籠つて居る。蓋し人間は萬物の長と云つて、一寸考ふれば甚だ潛越のやうにも思はれるが、若し此の世の森羅萬象に對し、意味を附する者有りとすれば、それは只だ人間のみである。山水明媚と云ひ、風光絕佳と嘆賞するのは、是れ獨り人間

のみではないか。世界の凡てに、價値を附する者も人間である。世界の萬事を研究するのも、唯だ獨り人間ある而已である。されば世界のあらゆるものは、皆な人間あつて始めて、其の本性を發揮し得るのである。電氣も、電話も、汽車も汽船も、山川草木、風雨鳥獸、蟲魚皆な然りである。

人間は凡ての物を支配する權利を有し、ありとあらゆる物は人間の爲めに存在する。何ぞ安息日の爲めに、人間が支配さるゝ理由があらう。凡ての物は人間の爲に意義を有して來る。詩も歌も、繪も劇も、哲學も科學、宗敎も人間の爲に存在する。故に宗敎の爲めに人類が存在するのではない。人間は宗敎を使つて行くのである。道德も人間の爲めに作られたのであつて、人間は道德の爲めに存在するのではない。夫婦關係も、財產も人間の爲めに有り、國家も社會も、學問も文藝も藝術も繪も劇も人間の爲めに存在する。されば人間は凡ての物に對して自主である事を自覺せねばならぬ。

基督は吾れ等人間に自主の精神を自覺せしめた。そして過去の文明は此の精神によつて開拓せられた。此の自覺よりして、數多の革命、幾多の革新が行はれた。併し此處に注意す可き事は、自主たれとは我儘なれとの意味でない事である。人間は道德の爲めに存在するのではない、故に虚もつけ、勝手な振舞もせよ、自分に都合よく生きよと云ふのではない。如斯生活は決して、自由、自主の生活ではない。人間が氣儘、奔放に生きる時には、道德の規範より脱したとするも、同時に他の束縛を脱することは出來ない。多年作つて居た家庭が面白からずとして忽ち解散したと假定せよ。一つの束縛よりは離れたとしても、他の束縛に陷つたのである。藝術は人間が作るものとして、徒らに廢頽氣分になり、所謂享樂主義、デカダン的に流れたらば、甚だ自由、自主の如く見ゆるけれども、其の實他に大なる羈絆を附せられたのである。卽ちこれ等の人々には他に免れ得ぬ大なる苦痛あり、それを脱れ得ぬものである。一世の視線を一身に集めた彼の『新らしき女』

と稱したりし或る婦人輩の末路や、或はその道連れとなりし男子の徒を見よ。彼れ等は實に人類の發展上許し難き罪惡に逆轉したに過ぎなかつた。我れ等は實に衷心より彼れ等を產みし、彼れ等の親に同情せざるを得ない。

五

基督の敎へた、安息日の誡は、勝手に流るゝな、自然に支配さるゝなと云ふ事で、人間は己れを支配し、自然を支配する處に全くの自由、全くの自主の生活がある。萬物を支配するものは、神より受けた眞の心であつて、此の天眞爛漫な人の心が神の心なのである。此の心には廣大無限な力が潛在して居る。此の清淨な、此の無限の力の精神に對しては何等の敵も、何等の障害もない—若し有りとすればそれは罪惡である—此の清い心の中に、最も自主の生活が營まれる。

安息日に身の休養を爲すと云つて却つて精神を腐らすに至つては、折角の休日も無意味になる。これは自主の人、自由の人の行に非ずして、却つて自然に支配

され、形而下の生活に支配される奴隷的人間の行である。吾々は基督の精神を良く服膺して、萬物を支配す可き大なる人間の使命を自覺し、他の總てを支配して行かねばならぬ。之れが眞の自主の生活であつて、神の精神に合一する行である。

日曜日は上に述べたやうに、一週間に於ける身體の疲勞を癒やし、汚れた心を洗ひ、身體を壯健にし、思を高きに趨せ神の力を得、以て來る一週日に意義ある生活を爲すの準備を營む日である。此の日に當つて我れ等は先づ人間の大なる使命を自覺せねばならぬ。

秋と信仰

一

秋の季節は自ら多く感じ、多く考へさせられるものである。吾々は此の季節に再び逢へたのであるが、然らば如何なる心を以て之れに對す可きか、之をも矢張り考へざるを得ないやうになる。實に秋には穀物が實り、果物が熟する。誠に喜ばしい時である。

現今の日本は漸く工業國と成りつゝあるが、元來は農業國である。炎熱に苦しむ夏の間に、百姓共が營々、辛苦して作つた稻は、秋になつて、房々と稔り、秋日和の暖い風に吹かれて、黄金の波を漂はせて居るその有樣は、見るからに愉快な

ものである。此處に一家の團欒も、一國の富も幸福も湧いて來るの感じがする。

刈り上げた稻を車に積んで、各々其の家へ運ぶ農夫共の活動振は、宛然お祭のやうである。否な秋は實にお祭の多い時であつて、郊外に住むと彼方の村からも、此方の村からも、終日終夜大鼓の響が絶えない。是れ我邦の宗教が土地と非常に密接の關係があることを示すもので、祭は五穀の豐熟に對する感謝である。それは祝詞にもよく現はれて居る。秋は實に目出度い時である。

栗の枝には實が半ば開いて毬彙の口からうるわしい色を見せたり、柿や葡萄や梨が黄金色や瑠璃色や、それ〳〵の色を以て秋の富を語つて居る。又吾々が八百屋の店頭に立つ時に、或は赤、或は黄、或は紅など五色以上に飾られて居る果實は、豐かな野の實りを見せて居る。

併し此の時期も漸く過ぎる頃には、木の葉が紅くなり、軈て野も山も紅を以て飾られる。野趣は此の時に味はれる。そして春の花以上に人を樂しましむるので

ある。木々の梢に織り出された綿は二月の花よりも美しと見るのは、決して古の詩人許りではない。然し秋は草木に依つて單にそれ丈のことをのみ吾々に語つて居ららか。

否な更に秋は千々に物を思はす時である。稻を刈り入れた後の、田の邊りに立つて眺める時に、その有樣は實に殺風景なものである。水全く涸れて、刈株のみ殘れる田の面は、乾上つて龜裂が出て居る。打ち續く廣漠たる淋しい野には人影も稀れになつて居る。風のまに〳〵落つる木の葉にも、何となく物のあわれが宿つて居る。梢に在つた果實も日一日と少なくなつて、終にはその影さへも殘さない。冷氣は益々肌に感じられる。かゝる時には人の心も何となく物足りない、うら寂しい、頼りないやうになつて來るものである。西行法師は『心なき身にもあわれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮』と咏つて居るが、秋の夕暮は洵に淋しいものである。秋は一面に物の充實を見せつけるが、他方には何となく物淋しい感

情を起こさすものである。然らば此の淋しみは何を敎へるか。

二

日本には古くから佛敎が盛であつて、悲觀的の思想が大に吹き込まれて居るのは、今更云ふまでもない。從つて秋に對しても、其の淋しい方面が大に高調されたのも自然の勢である。併しながら是れは非常に偏頗な考へ方である。秋は決して空寂のみを暗示しては居ない。それにしては充實があり過ぎる。秋には一方に於て一年中の努力の集つた、充實の氣分が漲つて居る。併し他の一方には悲觀的の氣分を見せる。吾々は秋に逢うて、此の二つの方面の何れを採る可きかと云ふ問題に逢著する。

西洋の畫にはよく『秋の氣分』とも題すべきものがある。例へばそれには、夕暮の景色が書いてある。其處に牧場がある。其の內の草は黃色になつてゐる。側に並木があつて、木の葉は褐色になつてゐる。夕方の靄が一面に薄く掛つて、高

い空の雲は、夕日に燒けてゐる。羊が二疋か三疋遙か彼方の小屋へ歸りつゝある。羊小屋を圍む柵もある。そして十七か八の田舍の單純な小娘が、それに凭れ掛つて、遠く見つめて考へ込んで居る。此の少女は果して何を考へて居るのであらうか

普通ならば此の繪に接する東洋人の頭には、只だ淋しいと云ふ感じが起るであらう。併し此の繪を描いた人は斯る消極的の感情をのみ表はす積りではなかつた。娘の心は秋の木の葉の落つるを見て、無論淋しいと考へるには相違ない。併し唯だそれ許りではない。此の寂寞を通うじて向ふには希望が輝いて居る。憧憬の氣分が湧いて來る。然らば希望、憧憬とは如何う云ふことを云ふのであるか、それは自身は朽つべきものゝうちにあつて、朽ちざるものを發見せんとすることである。ゲーテが自身の傳記にして、傳記に非ざる『ウイルヘルム・マイスター』の中に、ミニョンと云ふ一少女のことを書いた歌がある。これは有名なもので、人の能く唱ふものである。是れ彼の『枸櫞の花咲く國を知れりや』の歌である。

汝は枸櫞花咲く國を知れりや、
綠陰暗き處、金橙輝き、
藍たる空よりは清風薰ず、
高く靜かに聳ゆるは金桃樹、月桂樹、
實に汝はかゝる國を知るや
嗚呼我が戀人よ、汝と共に彼處へ
往かんとぞ懷ふ。

ミニョンと云ふは一人の可憐な伊太利の少女である。彼女は至つて活發な性質で、親の誡もものかは、常に山と云はず川と云はず、心の儘に飛び歩き、或は木に攀ぢ或は舟に乘つて、氣のゆくまゝに樂んで居つた。又或時は寺院の名畫や彫刻に見惚れて家に歸るのも忘れて居る。それが或る時山中を駈け歩いて居た時に或る輕業師に捕へられ、その仲間に入れられ、且つ故郷の何處であるかを口外することを嚴禁され、そして彼れ等の仲間に連れられて諸國を渡つて行くのであるが、彼の少女はどうしても故郷のことが忘られない。そを慕つて居る切な情が、此の歌に現はされて居るのである。

憧憬は高く清いものである、併しせつないものでもある。玆に苦痛がある。ゲーテも亦た『唯だ憧憬を知るものゝみ、何ぜ私が苦しむかを知つて居る』(Nur wer die Sehnsucht kennt, weiss' was ich leide)と云つて居るが、其の通りである。

三

秋の信仰は實に此の如き憧憬の信仰である。そして此の憬憧の信仰は我れ等の生活には極めて大切である。若し我れ等が現在の事實にのみ囚はれて居るならば煩悶があり、焦慮があり、誠に苦しいものである。併し若し憧憬の信仰を持つて居るならば、凡ての苦痛、或は焦慮に打ち勝つて行くことが出來る。そして前途に對する力强い溫愛に滿ちて居ることが出來る。吾々には何時も斯る心地を持ち

たいものであると思ふ。

併し憧憬には苦痛のあることを知らねばならぬ。だが此の苦痛は普通の心配とはちがう。努力者の苦痛である。プロメテウスのそれである。例へば、人を愛することも一つの憧憬である。そして其れには、苦痛が有る。併しそれを切り拔けて行く力がある。

固より苦なきとを求める人もある。それも普通の人情であるに相違ない。けれども苦なきは平凡に終ることを知らなければならない。丁度苦勞して上る必要なき土地の景色は平凡であるやうに。そして苦まなければ發展もない。大なるものに到達もしない。これらは皆な刻苦して後ちに得られるものであることを知らなければならない。殊に人間は初めより純潔なものはない。自覺は利己心と共に生じ、利己心は罪を伴うものである。之に打ち勝ち行くのは、苦しいものである。實際努力は常に苦を伴うて居る。併し此の苦には樂みが伴ふ。

若し諸君が一寸考へて見られたならば、此の事は直ぐ分る。吾々は衣食をするにも苦みが有る。病氣の日にも苦痛がある。人間萬事苦を離れない。併し若しその時に憧憬の心があるならば、種々な艱難は却つて、己を玉にするものである、必ずや凡ての難關を切り拔けることが出來る。

既に前にも云つたやうに人を愛する時にも、幾多の苦痛は有る。併しそれは苦痛とするに足らない。然らば何故の苦痛であるか。憧憬よりする愛は、これでよしと滿足することを知らないからである。より潔くより善くならんとするからである。人を愛するにせよ、或は學問、或は國家、或は社會を愛するにせよさうである。併し斯くの如き愛には危險性や俗惡性がなくなる。それは憧憬をするが爲めである。

併し唯だそれのみでない憧憬のある處には眞の生命があつて、活躍して居る。それは憧憬は單に現在にのみ生きないが故である。若し人間が過去に、或は現在

にのみ生きるやうになつたらば、其處には生命はない、活動もない。退歩であり、死である。否な未だそれのみでない。憧憬は希望を生じ、如何なる障害にも反抗し得る丈の力が忽然として湧いて來る。そして、生命の躍進が企てられ、無限の欲求が生ずる。『人間は打ち克たるべき或る者なり』とニイチエが喝破したのはそれである。要するに人間は常に過渡期にあるものであつて、一方に充實しつゝ、他方には缺けて行きつゝある。冬は春を用意し、春は夏を用意し、夏は秋を用意し、秋は冬を用意するのと同じである。そしていつももつと強い、もつと充實した者にならんとして、生活するのである。

四

故に吾々人類は昔から聖人君子を憧憬する、殊にキリストの如き、釋迦の如き人格を憧憬する。そして清い勇ましい心を得んとして進んで行く。吾々が毎日孜々として努力して居る所以のものは、卽ち之れが爲めである。秋は物靜で、物を

思はせる。淋しい野原を眺めて、枯れかゝつたやうな自然に接しては、自ら久遠の神祕を感ぜしめらるゝものである。草葉にすだく蟲の音も、自然の深い底知れぬ暗示を與へて居る。

秋は天高くして空は澄んで居る。吾々は此の高い清い空を見つめることが出來る。そして思ふがままに、天地の不思議に接觸することが出來る。吾々は此の意味に於いて秋より敎へられたい。否な斯る靜な物思はする秋に際して自ら敎へねばならぬ。

世上は雜然として落ちつかぬ、此の時に當り靜かに今の自身の狀態を考へ、益々高い所に進まんが爲めに努力するのは實に愉快なものである。秋はかくて神に憬れ、思を高くして行く可き、自然の天啓に富んで居る。

もろくの時

其一、　朝

ある時私は朝早く起きて、櫻の花を見る爲めに上野へ行つたことがある。殘月は朦朧として尙ほ沒せず、風や塵も未だ起らずして氣は淸爽である。爛熳たる萬朶の花は昨夜の微雨に濡ひ、芬芳たる容姿は事更に鮮であつた。日が出ると花に置く雨の滴も、松を浸す雫も、忽ち玲瓏として巨萬の寶玉を連ねたやうで、さながら水晶宮に入つた心地がした。丁度其間から立ち昇る蒸氣は旭日に映じて、恰も祭にたく燔祭の烟のやうであつた。是れ固より一朝の景色ではあるが、併し私に何かを語つて居る。之れは何か。私には神の慈愛を讃美しつゝあるのであると

感じられた。

幼き小供も亦た能く朝の時を解するものである。一層詳かに云へと朝の時を善く解する者は、最も幼きものである。彼等は東天紅を告げて、うす明るくなるや忽ち歡喜の聲を擧げる。これは恰も世の榮光と淸快とを知り、謠咏して新日を祝するに似て居る。彼等は未だ世の毒氣に觸れない。その眼は明かに愛と樂みと信仰と望とを述べて、神の恩寵の限りなく、その親實さは朝な〳〵新なるを告げる。

實に斯く快活なるを得るは、最も幼き者の特權である。暫くすると自然と心情との調和は破れることがない。既に學校に行くやうになつた者の朝の氣分は、幼兒と同一でない。彼等の醒むるや忽ち過失譴責を思ひ出すこともあり、不愉快を感ずることも少くないことがある。特に年長じた者になると、毎日〳〵の職務に就くまでには、幾許の時間を要することは、知る人ぞ知つて居る。氣色の進まざるが爲に苦めらることもある。煩悶の心を以て家にある者もある。かゝる場合に

は朝の時に於ても、眞に何を爲すべきやを知らないものである。冷々として一片の喜びもなく、一塊の愛もなく、不平忿怒に絶えざるものもある。吾々が此の如くなる時に神の恩惠を感じ能はざるのは素より當然である。かゝる時には日は永し、其の間に於て心の欲するが儘に行ふの餘地は不足あるなしと考へねばならぬ。そして朝の時は之を極めて神聖、清淨に守りたいものである。是れ實に有益なる自脩の法である。若し此の事を以て習慣となすことが出來れば、幾多の誘惑を免れることも出來やう。遂には正義の結果を得て、益々神を慕ひまつるであらう。

併し更に尙ほ考ふべきことがある。晝間は人々皆な其業務に從事する。此の業務は日々同じことを繰り返すので、單調にして乾燥になり易い。又晝間は憤懣恨戾して、一瞬間と雖も、平靜、沈着、獨自なることが出來ず、或は萬物の靈長たるべき人間でありながら、恰も水車に等しき生活を送り、朝とは唯だ僅かに衣服を着け、食事をなす少許の時間を意味するの外、他に何の意味もないものが多い

のは悲しいことではないか。若し吾々がかゝる境遇に朝を送り朝を迎へんか、生活の歡びは何によつて生し、活動の元氣何れより來るのであらう。英國の政治家故グラッドストーンは、政治上如何なる多忙の時でも、早朝未だ政務を見ざる前一時間は必ず、之を割いて心靈を養ふことに用ゐ、以て能く內部の活氣を銷することなからしめたと云ふ。吾々は皆な果してグラットストーンの好模範に從ふを得るや否やは知らないけれども、少くとも吾々が平日の第一時を神に獻げ、五分間にても或は十分間にても、氣を平靜淸淨にし、或は聖書を繙き、或は祈禱をなして、『吾々の思念を高潔にすれば、その利益は大であらうと思ふ。

要するに吾々は毎朝日々に新たなる生活を始めなければならない。それには神と共に始むるがいゝ。然るに多くの人々は朝起きて何をするかと云ふと、先づ手にするものは新聞紙である。而も唯だ一種に止まらず、數種を讀む、其の得る所果して幾許であらう。若干の疲勞と不潔の空氣に觸れた精神を以て、業務に就か

んとするのは愚も亦た甚だしいではないか。ポーロは、『時を用ふべし』と（弗所十六）教へて居る。吾々は特に朝の時を空費してはならない。

其二、午時

午時は口舌を潤ふす時である。詩的の趣味を以てしても、將又屋外の自然を觀ても、全日中最も乾燥無味で、風致のないのは午時である。けれどよく〳〵考へると午時も用ゆるに足りる。實は家族的生活の最頂點をなす時も午時にある。現在は事務の爲めに妨げられては居るが、家族が團欒して共に食堂に集る最も適當な時は午時である。そして玆に食ふものゝ何なるか、又食ふ有樣の如何なるかを見ると、一家の經濟、風儀、宗教的、精神の狀況を一目瞭然たらしめる。

經濟に關することは殆んど云ふ迄もないが、勤勉せざる者には食ふ糧も亦ない。家婦にして事ごとに注意を欠ぎ、家政拙劣ならんには、事多く闕如たるのである。

けれども黽勉、力行、必ずしも食卓に美味を盛り、若しくは必用の糧を得るの限りでないことのあるのは、甚だ傷むべきことである、是に於てか饑餓に苦しむものも生ずる。饑餓に苦しむは人世の不幸である。否な人世の不正不義である。吾々も亦た饑餓の苦を知つて居る。それは或は嘗て父母の膝下に在つた時以來ではないかも知れないが、書生の時代に此境遇を經過した者は多からう。若し吾々が人世の不幸を知り、此の不幸時にはどんな心地のするものなるかを實驗し、そして粗食して足るを知り學び得たらばそれは吾々の爲めに非常な利益である、脩錬である。然し正直に勤勉しても尙ほ且つ餓死に垂むとする者あるに至つては、是れ基督教の忍ぶ能はざる所である。近時世界の各國に於て、社會問題の勃發するのはこれが爲めである。昔の敬虔な詩人は神に云ふ、「なんぢは時に從ひて彼等に食を與へ玉ふ」と、又イエスは「何を食ひ、何を飲み、何を衣んとて思ひ煩ふ勿れ」と云つて居るが、何れも日用に必要な飲食物は得られるものと假定したに外

ならない。衣食は缺乏するを許さない。それを得るが爲めに、力行するは當然である。

又午時は家族の精神的生活が明かに現映し來る時機である。それは鋭敏なる觀察者の常に認むる所である。固より玆に家族の精神が現れるには、一家が團欒して食事をなすを要する。けれども職を外に奉ずる者ある社會では、此事が望まれない。これ現代では止むを得ないが、國民生活に取つては大に悲しいことである。一日の中に家族が悉く集り得るは幾度であらう、一人も洩れずに食卓を共にして相語り、相笑ひ、相樂しむは何たる快事であらう。此時の相貌、容儀、談話を看且つ聽く者は、是れ一家の萬事を看且つ聽くものである。固より飲食は物質的のもので、肉體を養ふものに過ぎないが、更に之に加味するに高尚なるもの、即ち靈的なるものを以てするのは、基督敎徒の義務である。若し是れなければ如何なる美味佳肴と雖、遂に俗物たるを免がれない。

若し午餐に加味するに靈的なるものを以てせんとすれば、詩人の云ふ如く「よろづのものゝ目はなんぢを待つ」の心を以てしなければならない。如何なる場合に於ても、吾々は有限と無限との一致を求める心、即ち宗敎心を以て居なければならない。場合が場合で物質的に傾くこと甚だしければ、益々之を要するのである。

其三、晩

舊約書にエホバ、アブラハムに云ふ「天を望みて星を數ふべし、汝能く之を數へ得るか、されば汝の子孫は此の如くなるべし」とある。是は夜が眞つ暗であつて、物色辨ずべからず、自らものすごき時に、神の恩寵が內部の人、即ち人の心を照らす光線の一である。實際夜星空を仰ぎ見ると、吾々の氣分は俄に變り吾々の視力は白晝よりも遠くに達する感がする。又詩篇の第九十には詩人が「千年もすでにすぐる昨日のごとし」と咏つて居る。更に翻つて彼の始祖アブラハムの感に

對し新約書の經驗はポーロがコリントに在つて傳道に從事をした時に、彼れは神がアブラハムに約束し玉ふたことよりも遙かに高き約束をなし玉ふを感じ神より懼るゝ勿れ默せずして語るべし、蓋我れ汝と偕にあれば誰も汝を害せんとて責むる者なし、且つ我が多くの民此邑にあり」と云ふ聲を聽いたと信じた。實にイラエルを守り玉ふ者は少しもまどろむことなく、寢ることなしとは眞理である。日中には噪然たりし雜沓も何時しか靜まり、晝の間にかゝつた塵芥汚穢は一つ〳〵に落ち去り、從つて吾々は再び已を顧みることが出來、永劫者を求めて止まざらしむるのである。是に於て內心の視力は一層加はつて來る。そして俗塵の爲めにやゝもすると誤られ、掩はれて見ることの出來なかつた事物の眞相を洞見し、吾々が爲す所にも水の泡の如きものと、永遠に朽ちざる神の國に屬するものとあるを、極めて明瞭に區別することが出來る。さうすると拔くべからざる信仰は勃然として起り、懷疑と苦慮とは一變して新らしい生命が湧いて來る。

併し同じく晩ではあるが、これとは全く違つた時もある。彼のヤコブが其の同胞エサウと會せんとした前晩はどうであつたか。彼れは狂氣の如く、衣を徹する迄の思を以て死と戰ひ淋漓として滴る汗は血のやうであつたとさへ云はれて居る。之を思ふと書に載せ、或は詩人の咏ふ晩の平和は虛欺のやうである。晩には風波が烈しい、そして怒濤は天を卷くやうであつて、一日の間に受けた悲慘な出來事は夜の靜けさに乘じて、悉く再び心の表面に浮び出で、幽靈の怪しき影は見る〳〵間に益々大きくなり、忽ち二倍し、三倍して、遂には其の極を知らざる程に巨大となるが如きこともある。かゝる時には內心の視力も、遂に盡き果て、只だ茫然として雲霧の閉づる海の上を眺めて居るやうな心地がする。

されば晩は晩なれども、晩にも色々ある。或は氣色極めて高く、爽快極まる晩もあれば、或は氣色甚だしく屈して、死ぬる計りの心地のする晩もある。けれど

も此兩極端の以外に、尙ほ中間にあるものもある。一言にして之を云ふと、良き家の宰となり、正理を遂行することである。吾々が晝は職分を盡くし、晩は家庭に樂しむことはそれである。然るに現在では社會の交際は甚だ繁雜になつた。夜を以て日についでも、尙ほ足らざるを恐れる程である。是に於て交際は快樂でなく、重荷にならんとして居る。或はもう重荷になつて居るかも知れない。或は其は尙ほ恕すべしとしても、これが爲めに一家團欒の快樂は奪ひ去られ、家族が相集つて共に談笑し、共に唱歌し、共に讀書するが如きことは出來なくなる。否なかゝる良習は遂に養成せられずして止むであらう。是れ實に嘆ずべきの至である。抑も此の如き一家團欒の樂は是れ實に一家幸福の基であり、從つて一國强富の基礎である。そして國民の高潔、清淨なる美俗や、道德は玆に養はれるものである。然るに若し此の基礎にして缺けんか、決して他を求めることは出來ない。けれど此の晩は又最も危險なる時とも云へる。晩は惡魔の出沒し易き時である。色々の

罪惡を行ふに好都合の時である。日の沒するは一種の誘惑である。日光を懼れる怪物は、時を得て夜陰に乘ずるものである。數かぎりのない非行は四方のほの暗き隅より匐ひ出づるではないか。されば吾々は「まどろまず又寢ねずイスラエルを守り玉ふ神」に祈り、我れとわが家、朋友、隣人、都會、村落、我國の青年を試みに尋き玉はざらんことを願ひたいのである。

我れは斯く信ず　終

大正七年五月一日印刷
大正七年五月五日發行

定價壹圓

著作者　三並良

發行者　東京市芝區三田四國町　日比野幸一

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　本間十三郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

不許複製

發行所　東京市芝區三田四國町　統一教會出版部

發賣所　同　六合雜誌社

325
282

終